第九輯

特251
305

新支那事情叢書

昭和十四年十一月

支那の抗戰能力其他に就て

內閣情報官
陸軍歩兵大佐 林 群喜

財團法人
東亞同文會

始

支那の抗戦能力其他に就て　目次

一、はしがき……一
二、支那軍の武力的抗戦能力……二
三、支那軍の經濟的抗戦能力……七
四、新政權樹立問題……一六
五、治安肅清工作の現況……一八
六、關東軍の持つ役割……二〇
七、國際情勢と日本の決意……二一

492
特251
305

支那の抗戦能力其他に就て

内閣情報官
陸軍歩兵大佐　林　群喜

一、はしがき

今日に於ける支那問題と云ふのは、結局三つに要約せられるのではないかと思ふ。第一は蔣政權に對する壞滅の工作、第二は新政權育成に關する問題、第三は支那抗日政權の壞滅と併行して行はるべき、所謂援蔣諸國の關係をどうして行くかと云ふ、此の三つに歸すると思ふ。そこで私は今これ等の三點に就いて聊か私見を披瀝して見たい。

二、支那の武力的抗戰能力

先づ支那軍の抗戰能力に對する判斷であるが、之は(一)武力的抗戰能力と(二)經濟的抗戰能力に分けて考へなければならぬ。

即ち第一は武力戰に對する抗戰能力である。戰爭が始つた當時の支那軍の兵力は二百師二百萬であつたが、作戰第一期の所謂南京陷落頃までに、北支方面で四十萬、中支方面で四十萬減つて、全體で百二十萬位に兵力が減退し、其の後支那側では兵力の增强に努め、其の後各會戰毎に兵力の增減を見たのである。これを主要な會戰に就いて見ると徐州會戰當時には百三十萬位であつたのが、此の會戰の結果百萬位に減耗し、漢口作戰前には再び百四十萬位に增强されてゐた處、此の作戰により約九十萬に減少した。そこで支那側としては軍を奥地に後退させて

その再建を企圖したが其の時分樹てた支那側の作戰計畫としては、武漢放棄迄を作戰第一期とし、日本軍の戰力を消耗するを以て主なる目的としたと宣傳し、昨年十二月以降一年乃至一年半の間を抗戰第二期とし、これを反抗準備期として兵力增强に努め、次を第三期として全面攻勢に轉ずると豪語した。かくて目下第二期に屬する軍の再建中であるが、先づ大本營を重慶に移して抗戰の本據とし、西北行營を西安に設けて程潛が之を指揮し、西南行營を桂林に設けて白崇禧が其の總指揮に任じ、揚子江を以てその境とした。又戰區と行政管區と一致させ、軍、政、黨の活動を一手に集中することの出來るやうな組織を執り、以つて軍の增强に努めた結果、最近に於て所謂江南作戰、長沙北方に於ける作戰前に於ては、支那側の兵力は約二百五十師團、約二百萬と推斷されるやうになつた。

斯う云ふ風に支那軍の兵力は補充增加せられたが、其の戰力はどうかと云ふ點

になると、內容貧弱で初の頃と比べると非常に減退したものと考へる。開戰當時に比し師團の兵力も減少し、新に改編せられた良い師團であつても一師九千位で又九千の人員があつても其の有する小銃は僅に二千五百、輕機は百五十、機關銃は三十五、迫擊砲が十五と云ふやうな風に減少して兵器、彈藥の補充が出來ぬ。それから最も著しいものは何かと云ふと幹部の補充難である。支那側としては徵兵制度になつてゐない關係上、次々と幹部を作り上げて行くためには非常な惱みがある。卽ち幹部が十分でなく更に敗戰感深刻で志氣阻喪甚だしく、その戰力は著しく減少したものと考へられる。

斯う云ふ狀態で支那軍の弱體振りと云ふものが、最近各地で現れて居るが、其の二三の例を擧げて見ると、彼の漢口の北方にある襄陽會戰に於て李宗仁の指揮する軍隊に對して攻擊を開始したが、こちらの兵力は三個師團位であつたけれども、向ふの約二十個師團を擊滅した。次に五月になつてノモンハン事件が起ると支那側も此のノモンハン事件に呼應する意味に於て、七月攻勢、八月攻勢を起した。併し此の攻勢運動は北に於ても、南に於ても、中支に於ても、遊擊戰を同時に行つて居ると云ふ程度のもので、我が軍に威力ある打擊を加へることも出來ず我が軍の猛反擊を受けて各方面とも脆くも慘敗せしめられた。

それから九月中旬江南作戰を實施したが、あれは第九戰區薛岳の指揮する中央軍三十個師約四十萬に對して之を擊滅しようと云ふ考へで、一部は九月中旬南昌附近から西の方、主力は洞庭湖に沿ふ地區から長沙方面へ進出し、次いで逆に兵力を北方に向け、殘敵を捕捉する如く實施した。此の戰鬪に於ける敵の遺棄死體及び捕虜は無慮四萬を超える狀態である。所が此の作戰に於ては長沙を占領しなかつたので、支那側では長沙方面から日本軍を擊退したんだと云ふやうな逆宣傳

もあつた。殊にアメリカ方面に對しては、此の長沙方面に於て支那が勝つたんだと云ふやうなデマ宣傳をやつて居る。之に就いては成る程長沙を奪ることも一つの方法だらうと考へられるけれども、今度の作戰では占據地域を貪ると云ふよりは敵の戰力を消耗すると云ふ趣旨から作戰が行はれたのである。

それから支那の空軍の現在の兵力は第一線機約三百數十機である。此等の多くは成都、重慶、西安等の要地防空に使用せられて居つて、第一線に飛出すと云ふことは甚だ少ない。先般十月三日と十四日に、漢口附近に約十數臺の飛行機がやつて來たが、結局目的を達せずして擊退されてしまつた。要するに武力戰的見地から見た支那軍の戰力は大體以上のやうな狀態で、支那側が今後相當努力を拂つても、恐らく戰勢を左右するやうな大きな作戰は出來ないだらうと思ふ。結局ゲリラ戰と云ふやうな程度のことしか出來ないと思ふ。

三、支那軍の經濟的抗戰能力

次は支那側の經濟的抗戰力であるが、此の點に就いては却つて讀者各位の方がよく通じて居られるので私が申上げるのもどうかと思ふが、二三の點に就いて御參考迄に申述べて見たいと思ふ。先づ第一は金融財政の因窮である。就中政府の收入が非常に減じて居ると云ふ點が第一であつて、戰費の補給と云ふものが續けて行かれない。之を若干數字を以て申述べて見ると、政府の歳出は一九三六年が十二億元、三七年が二十一億、三八年が二十四億、三九年が二十八億五千萬元となつたが、歳入の方は日本軍が主要な土地を占領したことに依つて非常に減じて居る。支那側の歳入の主要なるものはやはり關稅、鹽稅、統稅であつて、種々計算の方法はあるだらうが、概略觀察して見ると、關稅は十分の七乃至八位に減少

し、殘つて居るのは十分の二か三に過ぎない。隨つて稅額は六千萬元から七千萬元の程度である。鹽稅は七割位減少し、現在あるのが五千萬乃至六千萬元、統稅も亦七八割の減少を見て二千萬乃至三千萬元位の收入である。さうすると歲入の總額は低く見積つて二億、多く見積つても三億四千萬元程度ではないかと考へられる。そこで斯う云ふ歲入の不足を補塡する爲にどう云ふ方法を執つて居るかと云ふ點であるが、勿論公債を出す。是は今年の八月迄に二十億元で、此の中で政府の手取の分が四割程度だらうと考へられる。而もその擔保たるべき鹽稅、關稅は潰滅し、本年の一月には內外債の元利支拂停止をやり、其の未償還額が八月一日に五十億元もある譯で、公債政策は破綻を來して居ると云はねばならぬ。日本の公債政策と支那側の公債政策との間には非常な違ひがあると云ふことが云へるのである。次にその在外正貨がどれ位あるかと云ふと、戰前七億乃至八億の在外

正貨があり、其の後銀の現送等により戰爭第一年末には十二億元位になる程度であつたが大半武器購入に消費し、今日は殆ど無くなつてしまつたのではないかと思ふ。尤も個人の持つて居る貯金とか何とか云ふものは或る程度あるかも知れない。殊に宋並に蔣介石一派の外國預金額と云ふものは或る程度殘つて居るか知れないが、之を引上げて國家の用に充てると云ふことは恐らく出來ないだらうと思ふ。斯う云ふ狀態なので外國の借款に依らなければ政府の經費は賄つて行けぬ。然るに借款の擔保となるべき鹽稅、關稅と云ふものはなくなつてしまつたし、尤も奧地にタングステンとか、桐油とか、アンチモニーとか云ふものがあるけれども、是等を輸出する途は殆ど皆な日本側に抑へられてしまつて居るから、其の點は中々困難ではないかと思ふ。華僑の送金は昭和十三年度に於ては六億、之を事變前の法幣の價格に換算して見ると三億四千萬元になるが、此の華僑の送金が將

來どの程度行はれるか疑問であり、さう多きを望むことは期待出來ない。又外國貿易は入超が非常に多く、法幣暴落の一因をなしてゐるので、紙幣增發により補ふ外なく、日本軍が占領してゐない地域では到る處インフレ現象が起つて居るのに反し、上海ではモラトリアムの結果デフレーション現象が起つて居る。卽ち上海市場は國內一般とは違つた意味の經濟現象を起して居るのではないかと思ふ。是は私共には能く分らないが、兎に角財政的には非常な困難を感じて居る。

次に國民の思想に對する壓迫である。今まで申上げたのは國家の金融財政に關するものであるが、國民經濟も非常な壓力を感じて居る。農村の疲弊、それから避難民の蝟集、軍隊の集中等は交通機關の不備と相俟つて生活必需品其の他の物資移動、卽ち需給調節に非常な困難を感じて居る。向ふの情報を取つて見ると、品物を送る場合には、日本軍の居ない所——非占領地帶に於ては品物の輸送に宰領者を附けないと途中でふんだくられる心配があるから、護衞兵を附けて送ると云ふことである。就中主食たる米、麥、鹽と云ふものが少なくて、非常に困つて居る。斯う云ふ狀態で國民生活に對する壓迫と云ふものは、相當に非道いと云ふことが豫想されるのである。

斯樣な狀態であるが、蔣介石は初から西南方面に軍を集めると云ふ——是は蔣介石の手許にある直系の五十個師と云ふものを、將來いつまでも持つて居れば自己の勢力を維持出來ると云ふのが蔣介石の見透しのやうであるが、假りに蔣介石が西南方面に一つの小さな國を作ると云つた場合に、其の方面の奧地工業を成立して行くことが果して出來るかどうか。戰爭するには金と、軍需品と、人と云ふ三つの要素を必要とするのであるが、其の軍需品を造る爲に、外國からの交通を杜絕されて居る場合、奧地工業と云ふものの成立の可能性があるかどうかと云ふ

ことを見て行かなければならぬと思ふが、其の點に於ても可能性は甚だ少ない。

第一支那側の工業經濟と云ふものは未だ重工業の域に達してゐない。輕工業は大概漢口、京漢線東方地區にあつて、揚子江流域に限定されて居る。斯うなつて見ると新に奥地に重工業を起すと云ふことは非常に困難で、而も現在軍需工業に必要な石炭の如きは、支那軍の持つて居る地域では、全支に在る埋藏量の十二分の一位に過ぎない。隨つて日本と違つて、輕工業を重工業に直し、更に大きな軍需工業地帶を作つて、近代的な戰爭を爲し得るやうな軍需品を供給すると云ふことは全く不可能であると云つて宜い。斯う云ふ風な意味から言つても、支那軍が近代的な戰鬪を繼續する能力は不十分であると斷定出來ると思ふ。

次はさう云ふ風になつた場合に支那が外國から物を持つて來ること、又今日どの位の物が外國から入つて居るかと云ふ點であるが、之に就いては判つきり判斷

は出來ない。粵漢線が通じて居つた時分には、この鐵道の輸送力は日量九千瓲位と判斷して居つたが、是が今日は塞つてしまつた。滇越線、桂林ルート、ビルマルート、海岸の封鎖を突破して入つて來る密輸入、ロシア側から新疆省を通つて來る物、是等を全部集めて大體日量五百瓲から千瓲位であるかないかと云ふ見當である。故に廣東占領以前と今日とを比べると、外國からの輸入量は十分の一位に減つて居る。假令此の方面から外國の援助があるとしても、二百萬の軍を養ふには足らず、近代的の大會戰を遂行するだけの力のある物を入れることは、甚だ困難であると言へると思ふ。假りに西安から蘭州を通つて新疆省の北方附近迄の此の間の距離が、有利に見積つて八百里、少し不利に計算すると千里位ある。隨つて此の間に物を送るとすると、自動車輸送にしても相當數の自動車を持つて來なければやつて行けない。斯う云ふことを考へて見ても、支那側に對する陸路輸

送が如何に困難であるかと云ふことが解ると思ふ。唯だ航空兵器の輸送は是は長距離飛行が可能であるから、經費さへ出來れば此の方面に於ては相當の數量が輸入出來る可能性はあると言へるだらう。

斯樣に軍事的に見ても、經濟的に見ても、其の他の資源を通して見ても、支那が本當に抵抗して今日の戰局を左右するやうな戰鬪を交へる餘力のないと云ふことは、是はもう言ふ迄もないと思ふ。併しながら吾々が一面から考へて見なければならぬのは、支那側のもう一つの特異性である。支那側が今日迄その政治中心を叩かれても、經濟中心を叩かれても參らぬのは、半封建的經濟現象にもよるが何と云つても國土の廣大なる爲であるのと、簡易な生活に耐へ得る特性があるから、支那側の持久力に對しては存外大なる點あることを考慮せねばならぬ。勿論支那側としても大勢を挽回するやうなことが出來ないことは百も承知であるけれ

ども、暫く我慢をして居れば何とか情勢が變りはしないか、持久戰をやつて其の間に新しい事態の出來るのを待たうと云ふのが今日の狀態のやうに考へられる。其の新しい事態を期待する所には矢張り二つあると思ふ。第一は日本自體が手を引くに至りはしないかと云ふことで、是は支那人の頭に相當濃厚に入つて居る。日本の過去の戰鬪に於ては皆さうである。征韓の役、シベリア出兵、第一次、第二次濟南事件の例に見てもさうである。支那が頑張つたら宜いだらう、滿洲事變の時もさう云ふ考へを滿人は持つて居つたが、あの全く何もないやうな廣い所に一個師團も二個師團も入るやうな兵營が出來ると、日本だつて恐らくあの大きな兵營は背負つて歸れまいと云ふ氣持になり、それが非常に大きな宣傳になつて、滿人が日本に對して信賴するやうになつたと思ふが、今日、支那人の間に於ては斯う云ふ風な點に於て、日本が逃げてしまひはしないか、日本と手を握つて居つ

ても困ると云ふ感じを持つて居る。だから日本が其の中自ら歸るかも知れないと云ふやうなことに一つの希望を殘してゐる。更に國際情勢が轉換するかも分らない。其の變轉を待つて日本を牽制すると云ふ氣持があつて、何とかなるだらうと云ふのである。所がさう云ふ風な情勢の裡に起つたのが今度の歐洲戰爭である。歐洲戰爭は結局は援蔣勢力の後退であつて、東亞に餘り多くを顧みることが出來ないやうな狀態になつて來た。此の點蔣政權に對する非常な困難性を增加して居るやうで、蔣政權內部に於ても色々な惱みが、之に隨つて起きて來る狀態になつたやうに考へられるのである。

四、新政權樹立問題

次に申述べたいのは支那新政權樹立に關する問題である。是はまだ十分に能く分つて居らぬので確たることは申述べられないが、日本側としては一つの思想工作と云ふやうな意味から、或は占領地行政を成るべく輕減すると云ふやうな意味から、蔣介石政權に反抗する所の地方政權を今日まで育成して來て居る。例へば蒙疆の政權、或は臨時・維新兩政權、漢口、廣東の治安維持會等があるが、是等に對して、昨年は北支と中支のものが一つになつて、聯合委員會と云ふものを組織し、共通の問題は之に依つて始末をして行くと云ふので今日まで進んで來た。更に諸勢力を集大成して一つの新政權を作り上げんとの氣運が釀成せられんとしてゐる。そこで新中央政權の樹立に就いては、是は單に日支事變處理の當事者たるだけではなくして、日支國交を過去一切の相剋より脫却して大乘的な見地から善隣の基礎を確立し、東亞百年の計を樹てるべき一つの相手になる樣なものでなくてはならぬ。支那側の大勢は目下これが樹立に進んでゐるやうだが、併し樹て

る爲には日本も出來るだけの援助を拂はねばならぬ。それは併しどう云ふ形のものかと云ふことになると、政治形體は所謂分治合作主義を執つて進んで行くものの如くであつて、新中央政權の胎動が感ぜられてゐる。

五、治安肅清工作の現況

次は治安肅清工作の現況であるが、是は極めて簡單に申述べて見ると、主要な土地と主要な交通線と云ふものは、確實に日本軍の勢力の下に在ると云ふことが言へる。鐵道にしても津浦鐵道も最近夜間列車の運行をやつて居るやうである。それから北支方面は中支方面よりも治安維持の關係は宜い。北支では今年の七月までに、大體四百縣位あるが其の中の三百縣位は臨時政府の任命した縣知事が行つて活動してゐる。昨年までは知事を任命しても、知事が現場に到着出來ないと

云ふ狀態であつた。假令行つても縣廳所在地の城壁内だけしか力が及ばないと云ふ知事が澤山あつたが、今日では全縣知事の四分の三は、こちらの任命した知事が活動し得るやうな狀態になつて居る。それから鐵道の警備關係に就ても、昨年七月、八月の頃迄は、大概一ヶ月に二百五十件から三百件位の鐵道被害があつたが、今年は六十件から七十件の被害しかない（是は線路の破壞、電線の破壞等を全部寄せた數であるが）。さう云ふ風な狀態で今年の治安維持は非常によくなつて居る。それから蒙疆、此の地區は大體事變の前から文化的、經濟的な工作を進めて居つた地區ではあるが、北支、中支に比べて治安維持の關係は格段の相違がある。中支方面は蔣介石の中央軍と陣地を接して對峙して居るから、後方に澤山な兵力を配置することが出來ぬと云ふやうな惱みがある。併し是とても次第に部隊を分散、配置してゐるので漸次良くなつて來てはゐるが、更に新政權の實力を培

養して、さうして其の力に依つて補へるやうな方法を考へて行かうと云ふやうに進んで居るのである。

六、關東軍の持つ役割

次に支那事變に對して關東軍の持つ役割であるが、是は嘗つて東條次官のソ支二正面作戰と云ふ話が新聞に出たが、現在に於ても日本軍しては南方戰線は活動中の戰線、北方戰線は靜止せる戰線であると云ふ點に於て何等變りはない。支那事變の初から北と云ふものを考慮の外に置いて作戰することが出來ないので、こちらに兵力を出すには北方を抑へながら兵力を出すと云ふ譯で、今日まで支那事變の處理に當つて、北方方面は多少の妨害はあつたけれども、兎に角北方を抑へつゝ支那事變處理に集中し得て居ると云ふ點は、實に關東軍の力であると思ふ。張鼓峯事件、ノモンハン事件はあつたが、これ等ソ側の企圖を擊截して北方方面を安靜狀態に置き得たことは、關東軍の隱れたる功績であると思ふ。此の意味に於て關東軍が、支那方面軍の働いて居ることに比べて決して劣らない努力を拂つて居ると云ふことを力說したいと思ふ。關東軍に依つて北方安全を保たれ、以て支那事變處理の方針を途中で變へなければならぬと云ふやうなことなく、支那事變處理に邁進することの出來て居る狀態を私は非常に悅んで居る次第である。

七、國際情勢と日本の決意

以上のやうな狀態であつて支那側に於ける戰力其の他から判斷して日本は別に心配は要らないけれども、唯だ問題は戰後の問題である。蔣政權としては歐洲の情勢に鑑みて其の不安は益々增大して居る。支那側としてはどうもソ聯の方面も

思ふやうにならない。英國の方面も思ふやうにならない。そこで英佛の勢力をアメリカに肩代りをして貰はうと云ふ氣持が相當に濃厚である。隨つて此の點に對する活動は顯著なものがある。此の間、我が國が歐洲に對する不介入の方針を聲明した後で、アメリカの勢力に乘替へようと云ふ動きが頗る濃厚になつて來た。此の點非常に危險であると云はねばならぬ。アメリカが東亞に對して今まで打たうとした手と同じで、日露戰爭後に於ける例の南滿鐵道の買上問題の如く、所謂機會均等、門戸開放の名の下に出て來て此の手を打たうと云ふ氣持ではなからうか。斯うなつて來るとアメリカの一擧手、一投足と云ふものが、相當大きな波瀾を起しはしないかと思はれる。殊に最近アメリカ大使が歸つて來た時に、日本政府と話をしても駄目だ、日本の國民に一つ話をして行かうと云ふので、日米協會を選んで話をして居る。日本も餘程しつかり掛つて行かなければいかんぢやないかと云ふやうに心配せられる節もあるのである。何れにしても英佛の勢力を米國に置き代へられると云ふことになると、是は大變なことになるので、全力を擧げて之に對處しなければならぬ。此の意味に於て日本の決意と準備と云ふものが先決問題である。吾々としても十分の備をして行かなければならぬと思つて居る。歐洲戰爭が始つて援蔣諸國の中の英佛と云ふものが十分に力を拂ふことが出來ないことは明瞭であるが、東洋方面に於てアメリカが英佛の肩代りをやつてやらうと云ふやうな狀態で、此の國際情勢は歐洲戰爭勃發に伴つて、支那事變處理に非常に大きな動きを執つて居る。隨つて日本としては援蔣諸國に對して、蔣介石を援けることは損だから、日本と話合をして行く方が宜いと云ふやうな意味のことを十分に理解させる運動と云ふか——飽くまでも横車を押すならばひどい目に會はしてやるぞと云ふやうな意味合の、何か一つの手が必要ではないかと思ふ。今

日ボーランドあたりはあゝ云ふ狀態になり、バルカン諸國も國境方面に備へ、諸外國勢力を利用して何とかやつて行かうと云ふやうな、又トルコあたりも隨分困難な狀態であるけれども、英佛土協約を作つてやつて行かうと云ふ具合で、中立國も皆な悉く外交調整と國防力の充實、此の二つを一生懸命になつて充實させるよう努力して居るやうであるが、日本も丁度好い機會、と云ふと語弊があるが、好い機會に惠まれたやうである。一面困難なことも澤山あるやうであるが、是でうまく戰爭が片附くと云ふ風に考へずに、更に十分なる覺悟を以て、單なる不介入に終らないやうな手を打つて行かなければならぬと思ふのである。

昭和十四年十一月廿二日印刷納本
昭和十四年十一月廿五日發行　【非賣品】

編輯兼發行人　宇治田直義
東京市淀橋區戸塚町一ノ三〇
印刷人　河田保治
東京市淀橋區戸塚町一ノ三〇
印刷所　明立印刷株式會社
電話牛込四七九二番
發行所　東亞同文會
東京市麴町區霞ヶ關三丁目四ノ三
電話銀座(57)一〇五四八番
二六五六番

不許複製

396
550

終